

徳島・徳島城下町遺跡

（中徳島町一丁目地点）

1 所在地 徳島市中徳島町一丁目

2 調査期間 一 第一次調査 二〇〇一年（平13）四月～二〇〇二年三月、二 第二次調査 二〇〇二年四月～八月

3 発掘機関 （財）徳島県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 原 芳伸・近藤佳人・喜多啓二・樋谷久代・高橋栄子・前田綾博・岩佐正人

5 遺跡の種類 城下町跡

6 遺跡の年代 江戸時代



（徳島）

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

徳島城下町遺跡中徳島一丁目地点は、徳島城が置かれた城山（はじめ渭津、後に徳島に改名）の東側、現在は徳島県立城東高等学校の敷地内に位置する標高（現地表面）約二mの近世城下

町遺跡である。

天正一三年（一五八五）豊臣秀吉から阿波国を与えられた蜂須賀家政は、徳島に城を築き城下町の建設を進めた。それ以前の当該地域は低湿地であったため、江戸時代以前の遺跡はあまり見つからない。城下町は城のある城山を中心として、新町川・助任川などの網目状に流れる河川に広がる中州によりできた六つの島を中心に形成されている。それぞれの地区により住居区分があり、当該地区は「惣構」と呼ばれる徳島城の外郭「徳島」に位置する。三五〇石取りから四〇〇〇石取りまでの中・上級武士の屋敷が広がる地区である。調査地には時代によって二軒から四軒の屋敷が、文献や絵図などの資料により確認される。元禄四年（二六九二）の「御山下画図」（綱矩様御代御山下画図）より、坪内家（二〇〇〇石）、山田家（二〇〇〇石）、立木家（三五〇石）、太田家（四〇〇〇石）の存在が、また天明年間（一七八一～八九）の「御山下画図」などから、これ以降幕末にかけては坪内家と家老で四〇〇〇石取りの「蜂須賀駿河喜儀」の屋敷であったことがわかる。

屋敷地からは多数の遺構が検出された。木簡の出土遺構はいずれも廃棄土坑で、多量の陶磁器や土製品・木製品などの遺物が共伴している。

木簡は計二二点出土した。第一次調査区のSK四〇五五（二点）・SK四〇五二（四点）は、一七世紀後半の土坑である。SK三

○六六(一点)は一八世紀中頃の土坑で、これらはいずれも屋敷地内のゴミ穴である。

第二次調査区は第一次調査区の東側に続く調査区である。SK四一四九(二点)は坪内家屋敷奥にあたるとみられる土坑で、その北の屋敷境付近にあるのがSK三三二九土坑(八点)である。これらも全て屋敷地内のゴミ穴である。

8 木簡の积文・内容

一 第一次調査

SK四〇五五

- (1) ・「 $\vee$ 山田織マ様 阿ハ 猪山 〇」

・「 $\vee$ 五ツ之内 山田彦八郎」

163×25×4 033

- (2) ・「たふ八たも」

・「十八たん」
〔緒村カ〕

110×(17)×3 011

SK四〇五二

- (3) ・「 $\vee$ 中庄」

・「 $\vee$ 五斗」
〔与カ〕
「門」

135×22×4 033

- (4) ・「 $\vee$ 」

・「 $\vee$ 四斗入」

132×21×4 033

- (5) ・「 $\vee$ 」

・「 $\vee$ くかしさま御内
まいる」

(152)×(24)×6 033

- (6) ・「 $\vee$ 」

・「 $\vee$ 」
〔老カ〕

(63)×16×3 039

SK三〇六六

- (7) 留
〔置カ〕

(120)×26×4 051

二 第二次調査

SK四一四九

- (8) 「 $\vee$ 」

95×20×4 033

SK三三二九

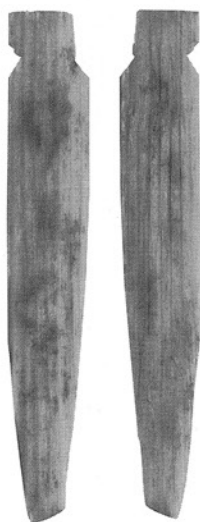
- (9) ・「長井六郎」

・「長井六助
長井六郎右衛門」

193×66×10 051



(1)



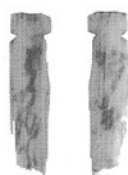
(3)



(2)



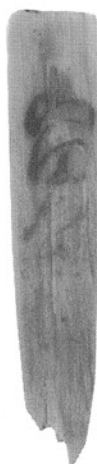
(8)



(6)



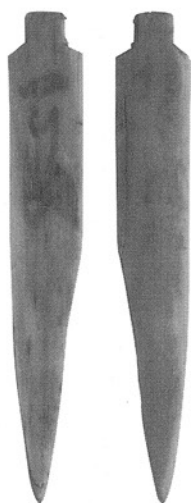
(11)



(7)



(10)



(4)



(5)

(10) 「新平」

112×15×3 051

(11) 「岩山所」

134×60×7 065

(1)は上端部の左右に切り込みが入る。山田彦八郎から兄である山田織部に宛てた荷札木簡である。「阿ハノ猪山より」と読むと、送り主山田彦八郎は徳島に、宛先の山田織部は国外(江戸か)にいることになる。(2)は量目を示す荷札木簡か。裏面五文字目は「緒」または「指」の可能性がある。(3)は、阿波では一俵が五斗であったことがわかっており(根津寿夫「徳島藩中老酒部家出土の荷札木簡について」徳島考古学論集刊行会『論文 徳島の考古学』二〇〇二年)、おそらく米俵の荷札であろう。「中庄村」とすれば同村に領地のあった給人(藩士)のものと考えられるが、出土地点の居住者の領地には該当しない。(4)は上端部の左右に切り込みが入り、「四斗入」米俵(米でない可能性もある)を示す。反対面には年貢貢納者の人名と思われる墨書が確認できるが判読できない。(5)の「まいる」は私的表現で、女性に宛てた品物の付札の可能性があり、武家社会の贈答関係が窺える木簡である。(6)は上端部左右に切り込みが入り下端部は折れている。表面は判読不能。裏面の一文字目は「苞」か。(7)は上端部は折れており下端部は尖っている。(8)は上端部左右に切り込みが入り、下端部は尖る。一文字目は「▲」の形に墨で文字を塗りつぶしている。(9)は上端部が稜なしで尖り、下端部は直頭型を呈する。

表面は平面であるが、裏面は木材の側面の曲面をそのまま利用している。両面に「長井」姓の三名の人名が書かれている。これらの人物は、坪内家と道を挟んだ向かいの屋敷の住人であることが知られている(天明年間の「御山下画図」)。(10)は下端が尖っている。「新平」は人名と思われる。(11)は縦長で方形の木札である。用途は不明。なお、釈読にあたっては、徳島市立徳島城博物館の根津寿夫氏のご教示を得た。

9 関係文献

〔徳島県埋蔵文化財センター〕『徳島城下町遺跡 中徳島町一丁目地点―徳島県立城東高等学校校舎改築工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書』(徳島県埋蔵文化財センター調査報告書五七、二〇〇四年)

(田所賢治)



(9)